

地方の会報紙より

スローライフに
命を紡ぐ日々

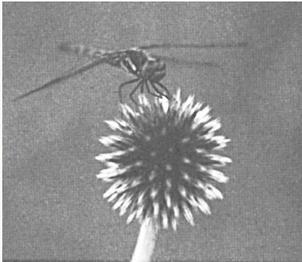
鞍手支会 金澤 啓
(福岡県退職小学校校長会会報 第99号)

郷愁

県道沿いに
小さな自転車屋がある
乗り合いバスが通ると
でこぼこ道から
舞い上がる土煙に
作業場はたちまち
呑み込まれてしまう
作業場の床の上に
不似合いな大きな
黒板が置かれている
「寄っていかんね」
親父さんが顔中髭だらけにして
ニッと笑って手招きする
「今日はこの句が一等賞」
白墨で書かれた
俳句の中から私は一句を選ぶ
郷愁は赤きトンボの生るる頃あゝ実

「この山の向こうが
あたしの故郷でね
盃蘭盆になると
赤とんぼが空一杯」
親父さんの視線が 宙に浮く
自転車屋は 今はない

7回の手術と入院に耐えてきた体でしたが、70歳を過ぎての交通事故は、流石に超え難い大きな壁でした。歩行困難な日常生活の中で、残された時間への夢や期待は完全になくなりました。そうした悶々の三年間、絶望の向こうに少し光明が見えてきました。(私にはデジカメとパソコンがある、この文明の機器を友にしてなんとか楽しめないか)希望と挫折、波乱と充実。その狭間で出会った人間模様、私の心にはその一こま一こまが、鮮明な記憶として残っています。その一つ一つを再現してみよう。書くことの豊かさをパソコンに託し、その心象表現をデジカメで映像化する。少しずつ実現への期待が高まってきました。その向こうに、私の歩いてきた道が見えてくるような気がします。



(阿蘇にて「ヒゴタイの花」)

スローライフの楽しさでしょうか。

私を変えた

あの「指導」

三条支部 宮島 隆
(新潟県公立学校退職校長会「会報」第45号)

二十数年前、私が初めて教頭になった頃のことである。教頭職は、校長の方針や判断を仰ぎながらことに当たる職務であることから、とにかく校長にはよく相談し、指導を仰いだ。

しかし、私自身、不勉強で不慣れだったことに加え、年配で個性豊かな職員が多かったため、校務の遂行や職員との情報共有などで気遣う日々が続き、意気込み程の成果は望めなかった。

そのような折、校長から次のような指導を戴いた。

「校務の遂行に当たっては教頭は自分の私心を捨て去る気概をもち、影武者のように目立たない存在になることが、時には必要である。」

そして、職員を前面に据え、職員の行う業務が、的確で効率的に進められるように整えていくことが大切である。

それ故に、「この仕事は教頭がやりました」などと言う言葉は聞きたくもない。」という内容の指導であった。

私は、これには大きな衝撃を受けたが、有難い指導と受け止め、翌日からは「職員が仕事をする。教頭はその影武者である」という新たな心で業務に臨んだ。

すると、自ずから職員一人ひとりの努力や熱意がよく見えてきて、それらを認めたり賞賛したりできるようになり、また、ねぎらい言葉や感謝の心、思いやりの気持ちにも配慮ができるようになった。

以後、私も教頭としての研修に励み、学校では分掌や責任体制も機能し、校務は職員の手によって概ね順調に遂行され、私自身の職員への必要な気遣いも解消された。

しかし、実践の厳しさを含んだこの含蓄のある指導は、後々、大変有難く思われ、私の心を大きく変えたものとして、退職後の現在でも、脳裏に強く残っている。

「ふるさと」
「信濃の国」

松塩筑支会 宇治橋克彦
(長野県退職校長会会報 第11号)

平成24年10月27日、長野市立後町小学校閉校式典に、旧職員として参列した。明治9年朝陽学校創設以来、137年の時を刻み閉校となる。昭和30年に完成した体育館で式典が行われた。第二部の音楽会は、全校児童33名が奏でる二時間余の演奏であった。歌声は音程、リズムに狂いがなく、一言一言の言葉は歯切れ良く、館内の隅々まで響いた。児童を支える教師は黒子に徹し、師弟同行で地域住民や卒業生らに、感謝の気持ちを表す感動的な式典であった。その中の会場全員で合唱されたのが、高野辰之作詞の「ふるさと」である。「忘れがたき ふるさと……」一語一句をかみしめながら、合唱の輪に加わった。小学校教師で十校を歴任した私には、後町小学校は忘れ難き故郷である。

資質向上を期した朝学の読書、自主的参加の講習会や講演会に職員旅行、年度末に発行された職員文集。児童らと過ごした裸足の生活、反復練習のドリル学習、楽しかった土曜日の自然学習。5ヶ年児童と過ごした往時の佇いの100年の石、プール、教室を見学しながら、ご指導下さった先生方お世話になった地域の皆様へ深謝の念を捧げ別れを告げた。

長野県歌「信濃の国」は、松本藩出身浅井洌作詞、北村季晴作曲である。信州大学教育学部附属長野小学校校歌でもあり、長野県退職校長会総会、松塩筑支会総会では、六番までの全曲が声高らかに斉唱されている。

浅井は90歳の生涯の中、県下74校の校歌を作詞した。明治期38校、大正期26校、昭和期10校である。現在歌い継がれている学校は28校あり、私の母校塩尻東小学校もその一つである。書家であった浅井は、請われれば気軽に自作の校歌を揮毫し、学校の宝物として大切に保管されている。

(中略)

「ふるさと」は、日本人の絆の歌であり、「信濃の国」は長野県民の絆の歌である。

浅井洌と高野辰之は、信州の風土と教育が生んだ偉人であり、我々の誇れる大先輩であることを肝に銘じたい。

くにさき教師塾を
お世話して

国東市 重吉喜一郎
(大分県退職校長会報 146号)

「今の学校は、先輩から後輩への指導がままならない現状がある。もっと先輩教師の実践・考え方、さらには生き方までじっくり学べる場を提供したい」との強い思いで昨年7月に「くにさき教師塾」が立ち上げられた。

開塾式で国東市長から「ふるさとの将来を担う人材を育成するために教師塾で自己研鑽に励んでもらいたい」と激励された。

教師塾はくにさき地区退職校長会を中心に、校長会・教頭会で組織された「くにさきの教育を創る会」が主催して、教職員自らが主体的に学びあえる場として、毎月一回水曜日に開催されている。

内容は若い教職員向けから管理職向けと幅広く、県下各地から講師を招聘している。開塾当初はそうでもなかったが、回を重ねるにつれて趣旨や内容が評価されるようになった。

これまでのアンケートにも「多くの講師の専門的な話を身近に聞けて大変役についた」「どの講座もすばらしい。今年は今講座を受講する」「明日からの実践に生かせる内容だった」「もつと多くの仲間に関かせたい」等の声が数多く寄せられ、先生方の熱い期待が伝わってきた。

今年幼稚園の先生の入会や、他市からの受講生もあり、教師塾の広がりを実感している。

私はこの事務局をもう一人の職員と分担しながら2年間お世話してきた。業務の内容は、講師の選定、教師塾の実施計画や案内、会計等結構大変である。

この教師塾が教師の実践力や意欲の向上に役立つようにしていくとともに地域の子どもたちが心豊かで、たくましく成長してくれることを願っている。

近況

荒尾 弘 功

(熊本県退職校長会会報 第168号)

荒尾市退職校長会の名簿を

見たら、いつの間にか最高齢者になっていて驚いた。他の郡市では百歳前後の方がかなりおられるが、当市では会員数が少ないためか、94歳の私が一番の長寿者になっている。うれいような寂しいような気持ちである。

長生きしていることは確かにめでたいことであるが、残りが少ないと思えば寂しい。今は足腰痛の他に数病患っているが、すべて症状が軽いので生活に支障はない。家内が5年半前に亡くなったからは一人暮らしを続けている。炊事、洗濯、掃除、買い物等家事一切や庭仕事も一

人で行く。一人暮らしは自然に生活が規則正しくなる。起床、食事、家事、睡眠等時間を決めてきちんとする。こうして体を動かし規則正しい生活をするのが長寿に役立つように思う。

また、何事も無理をしないように心がけている。庭の除草をやりながら疲れるとすぐ止めて無理をせず残りは明日送りにする。無理は長寿の敵である。それによく小さい旅をする。

旅は昔から好きで停年後の頃はかなり遠くまで出かけたが、年老いてからは2、3泊程度の旅である。

旅は身体への運動になるし、頭の体操になる。常に心身を動かすことが長寿に大切であると思う。

偉そうなことも言ったが、もうこの年であるから、いつ、ばったり逝くかも知れない。

「ふるさと桐生の民話」

桐生支部 清水 義男

(群馬県退職校長会たより 第58号)

在職中から興味・関心をもつて取り組んできた「ふるさと桐生の民話」の採録活動が、退職を契機にして一挙に花開いた感じの現在である。

民話のもつふるさとの原風景、神仏や自然に対する畏敬、先祖への敬虔な思い、科学や事実を超えて、貧しいながらも

もおおらかに生きていた祖先の心、日常生活の中に生みだしていたユーモア、そして伝統・風俗・習慣など……：こういった民話の魅力に触れながら、そして祖先の心と語り合いながら、細々と実践してきた採録活動が、退職によって時間的に自由な身となった関係で、活発に活動できるようになり、手元を集まる民話の量が日々大幅に増大したのである。

同輩たちに「民話の採録は、活動そのものもすばらしいが、

まさにあなたにとつての健康維持活動だね。大勢の人たちと対話を重ねながら地域を巡り、得られた民話を文章化し、写真を撮ってイラストを描く。頭は使うし体を動かすので最大の気分転換だよ。こんないい健康法は、ほかにはそうはないだろう。」と言われて、なるほど、そういう見方もあったかと納得。さらに民話の採録活動に拍車がかかっている。

民話の採録に手を出したのが昭和36年(1961年)だったから、採録活動はすでに半世紀を超えた。わずかな活動の積み重ねでも「継続は力なり」で、この間に五百話近い桐生の民話が、私の手元に集合してきてくれた。

この現在の採録活動終了後は「桐生の民話集」に仕立て上げていきたいとの夢を描いている。「目標をもって頑張ることが若さを保つ秘訣」と言われることから、この夢の実現に頑張るつもりである。